

教職課程に関する短期大学生の意識

植月 美希

〈要旨〉

本研究では、短期大学における教職課程の意義を考える手がかりとして、短期大学生が教職課程にどのような意識を持っているのか、教職課程の履修を通じて学生がどのように変化しているのか等について、本学現代教養学科、子ども学科、並びに関東圏の3年制の保育系学科の学生を対象に質問紙調査を行った。その結果、現代教養学科では元々教員を志望していた学生は子ども学科に比べ少ないものの、2年間の履修を経て教員になりたいという思いを強めている様子が見られた。また、実習で生徒とかわかる自信のない者や、指導していただくという謙虚な態度について自信のない者は教職課程を途中で断念するといった状況も明らかになった。一方、子ども学科では、もともと幼稚園教諭になるという強い希望を持っていたものの、3年間の学びを経て、保育士やその他の進路を希望する者がいた。これは、現代教養学科、子ども学科いずれの場合でも、短大での教職課程の履修が、将来の職業選択に一定の役割を果たしていることを示すものと考えられる。さらに、他の短期大学の学生との比較から、本学は卒業後に編入・進学する割合が比較的高いことも示された。編入・進学する卒業生全員が必ずしも編入・進学先で教職課程を履修するわけではないが、継続して履修する者は多い。これは、本学の場合、短大のみで教員養成が完結せず、引き続き1～3年間の学びを経て教員を目指すための資質や相性などを確認する第一段階として機能しているものと考えられる。

キーワード：短期大学 教職課程 意識

1. 目的

福伊・佐々木・胡（2005）では、短期大学生（幼児教育、生活、美術学科）を対象に、教員免許取得希望について質問したところ、教員免許を「ぜひ取りたい」と考えている者が34.1%、「できれば取りたい」が20.8%と、半数以上の学生が教員免許の取得を希望している状況が示されている。ただし、学科別になると、幼児教育学科では「ぜひ取りたい」が76.2%、「できれば取りたい」が16.1%、美術学科では「ぜひ取りたい」が20.9%、「できれば取りたい」が18.0%、生活学科では「ぜひ取りたい」が6.9%、「できれば取りたい」

が26.0%と、学科によって大きく傾向が異なることが示されている。また、教員になりたいかについては、「ぜひになりたい」者が17.8%、「できればになりたい」が25.8%であった。学科別で見ると、幼児教育学科では「ぜひになりたい」が42.6%、「できればになりたい」が40.8%、美術学科では「ぜひになりたい」が5.8%、「できればになりたい」が19.4%、生活学科では「ぜひになりたい」が4.0%、「できればになりたい」が17.0%であった。いずれの学科も教員免許取得希望者よりも教員希望者は少ないことが共通の特徴として見られる。しかし、免許取得希望の強さや、教員希望者の割合は、学科によって大きく異なる。特に、保育・幼児教育系では、免許取得・教員希望の学生が他学科に比べて数倍多い（福伊他、2005）。

このような傾向は、保育・幼児教育系学科と比較的分野が近い小学校教育系学科と比較した場合にも認められる。例えば、田中・二子石・永渕（2016）によると、保育・幼児教育系学科では約9割が幼稚園あるいは保育所への就職を希望していた。一方、小学校教育系学科では、小学校教員を志望する学生は約7割にとどまっていた。また、保育・幼児教育系学科では小学校教育系学科に比べ、「小学校入学前」に将来の希望を決めている学生が多い傾向が見られ、比較的早くから将来の職業として意識している傾向がある。このように、教員免許が取得できる学科であっても、免許取得や教員になろうという意欲は学科によって大きく異なる。本学においても、子ども学科では教員免許取得率が100%近いのに対し、現代教養学科では2017年度の教員免許取得者は22名に過ぎず、教員免許取得率は学科全体の5%以下にとどまる。

これらの福伊他（2005）や田中他（2016）の研究は学科全体における教員免許取得希望について調べたもので、実際に教職課程を履修している学生の間に学科間でどのような差があるのか検討されているわけではない。実際に教職課程を履修している学生の間には免許取得希望や教員になりたいという希望について、特に前者については大きな差がある可能性は低いように思われる。一方、後者の教員になりたいという希望については、分野によって教員採用の難易度などに差があることや、学生の特性が学科によって異なることから、学科によって差がある可能性は高いだろう。本研究では、この点を含め、教職課程を履修している学生の教職課程への意識について、教養系学科と保育・幼児教育系学科に着目し、検討する。そのことを通じて、短期大学における教職課程はどのような意義を持っているのかについて考えていきたい。というのも、教員養成に関しては、修士レベル化し、教員を高度専門職業人としようという答申が、中央教育審議会（2012）で出されていた。しかし、同年12月には政権交代もあり、教員養成の修士レベル化は実現に至っていない。このような状況の中で、短期大学では2種免許状を取得できる教職課程が幼児教育系（幼稚園教諭）を中心に多数設置されている。そして実際に、少なくない数の学生が教職課程で学び、教壇に立っている現状がある。そこで本研究では、短期大学生が教職に関してどのような意識を持っているのか、教職課程を通じて学生がどのように変化しているのかを質問紙による調査を行い、その調査結果を踏まえ、総合考察において短期大学における教

職課程の意義を検討する。

2. 調査1

2.1 目的

教職を履修している短期大学生が、どのような意識で教職課程を履修しているのかについて、質問紙調査法により明らかにする。なお、福伊他（2005）や田中他（2016）で示されているように、教職課程に関する意識は、例えば幼児教育系の学科では教職履修者が多く、それ以外の学科では比較的少ないなど、学科によって大きく異なることが予想される。そこで、本学子ども学科（幼稚園教諭2種免許状を取得可能）と現代教養学科（国語、英語、社会、家庭のいずれかの中学校教諭2種免許状を取得可能）の学生を対象に調査を行い、比較することとした。

2.2 方法

調査は1年次終了時と最終学年時の教職科目の後期授業の第14回、あるいは第15回目に実施した。2016年度に中学校教諭2種免許状が取得できる本学現代教養学科の教職課程履修中の1年生33名、2年生計32名、幼稚園教諭2種免許が取得できる同子ども学科の1年生92名、3年生89名が授業の一環として調査に参加した。2017年度にも、2016年度と全く同じ内容の質問紙に対して、本学現代教養学科の教職課程履修中の1年生27名、2年生計20名と、同子ども学科1年生94名、3年生88名が授業の一環として調査に参加した。なお、この他に、日本語母語話者ではない学生や、調査への同意が得られなかった学生が若干名いたため、これらのデータは分析から除外した。

2016年度と2017年度のデータに大きな傾向の違いは見られなかったため、両者を合わせて、現代教養学科1年60名（平均年齢19.16歳、標準偏差0.97；以後、 $\pm$ で示す）、2年52名（ 20.23 ± 1.10 歳）、子ども学科1年186名（ 18.97 ± 1.20 歳）、3年177名（ 20.82 ± 0.63 歳）の合計475名のデータを分析に用いた。なお、本学現代教養学科を教養系学科、子ども学科を保育・幼児教育系学科と整理することがある。

2.3 結果と考察

2.3.1 教員免許取得希望年齢・きっかけ

まず、教員免許を目指した年齢について尋ねたところ、現代教養学科では平均 17.07 ± 2.13 歳、子ども学科では 14.43 ± 4.09 歳であり、幼児教育系の方が比較的早く教員免許取得を希望していることが示された（Fig. 1；現代教養学科については2016年度の現代教養学科1年生は、2017年度の現代教養学科2年生にあたるため、データの重複がある。そこで、データが重複しないよう、2016年度の1、2年生と、2017年度の1年生のデータのみを使用した）。対応のない t 検定を用いて検定を行った結果、この差は有意なものであることが

確認された ($t[276.06] = 8.51, p < .0001$)。

また、現代教養学科では、「教員免許取得を他者から勧められた」と回答している者が半数を超えているのに対し、子ども学科では「教員免許取得を他者から勧められた」と回答している者は半数以下であった (Fig. 2)。なお、「教員免許取得を他者から勧められた」と回答した者のうち、「母親」に勧められたという者がいずれの学科でも30%を超えていた (Fig. 3)。

現代教養学科では、一部は小さい頃から教員免許取得を希望しているものの、大部分の学生は17歳前後という入学直前・直後に教員免許取得を希望しており、それには母親を中心とした他者の影響が関与していることが明らかになった。一方、子ども学科では、教員免許取得を小学生や中学生の頃から希望している者が比較的多く、同じく教員免許を目指している者であっても、学科によって傾向が異なることが示された。

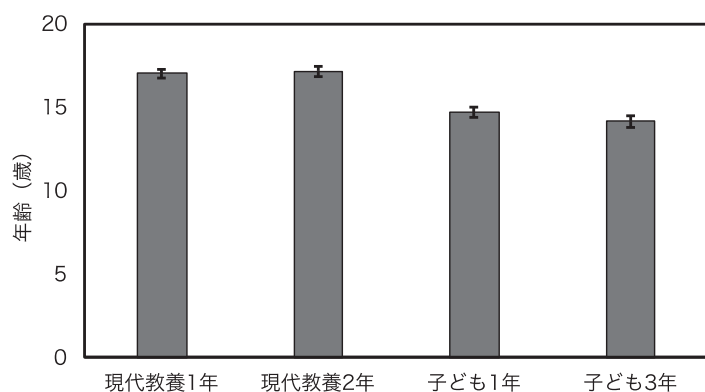


Fig. 1 何歳から教員免許取得を希望していたか？

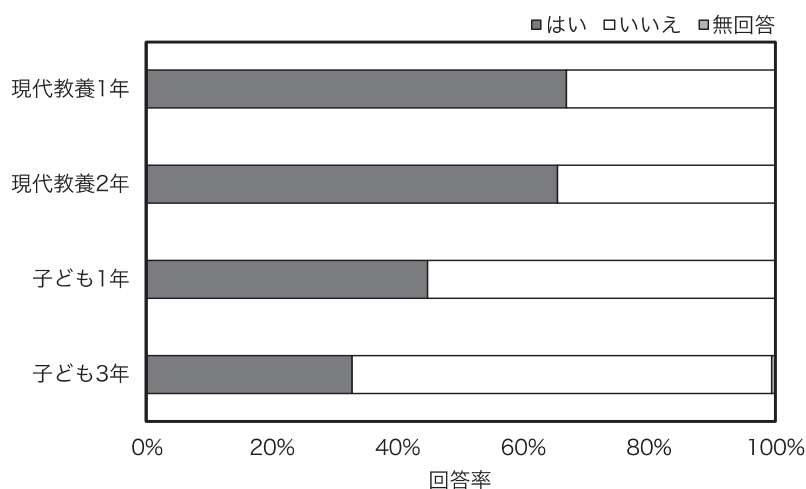


Fig. 2 教員免許取得を誰かに勧められたか？

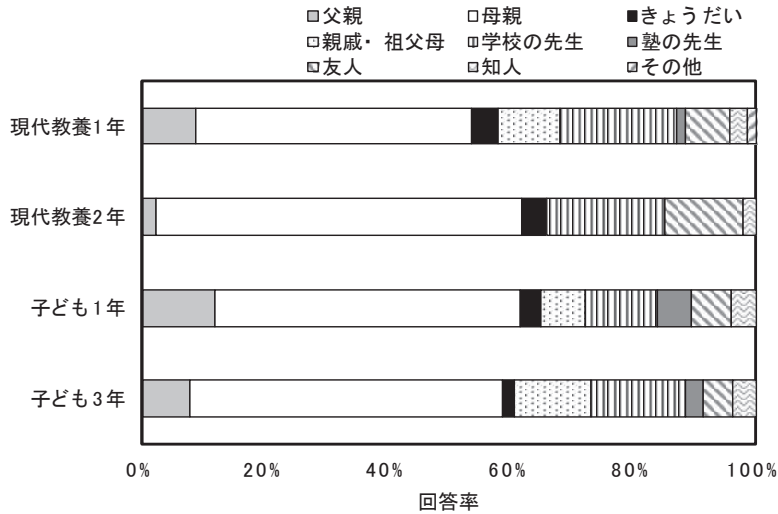


Fig. 3 教員免許取得を誰に勧められたか？

2.3.2 教員免許取得希望の強さ

入学時と現時点（1年次終了時、あるいは最終学年終了時）において、教員になるという希望の強さをそれぞれ100点満点で回答させた結果を Fig. 4に示した。現代教養学科1年は入学時でも1年次終了時点でもいずれも55点前後で有意な差が見られなかったが ($t[59] = -0.17, n.s.$)、2年生は入学時47.25点、2年次終了時点では58.08点と、有意に高くなっていた ($t[51] = -2.42, p = .019$)。一方、子ども学科1年は入学時が平均81.14点、1年次終了時点73.85点で、有意な低下が見られた ($t[183] = 4.55, p < .0001$)。同様に2年生も入学時80.70点、3年次終了時点66.51点と、有意に低下していた ($t[181] = 5.88, p < .0001$)。子ども学科は現代教養学科に比べ全体的に教員になりたいという気持ちが強かったが、その一方で、希望の低下が有意であった。これは、短大での勉強を通じて幼児教育への理解

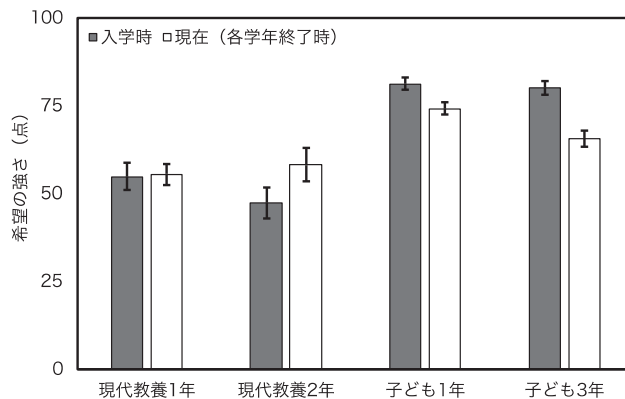


Fig. 4 教員になるという希望の強さ (最大100点)

を深め、幼稚園教諭として子どもに関わることを以外の進路（例えば、幼児教育関係の企業で働く等）を見つけた学生がいたことや、勉強を通じて幼稚園教諭ではなく保育士を希望する学生が存在することが原因ではないかと考えられる。

教員免許取得希望についても同様に希望の強さを回答させた結果を Fig. 5に示した。現代教養学科1年生は入学時と1年次終了時点では85点前後で有意な差はなかったが ($t [57] = -0.93, n.s.$)、2年生は入学時は87.9点であったが、2年次終了時点では95点を超え、入学時より有意に高くなっていた ($t [50] = -2.953, p = .005$)。一方、子ども学科は、入学時も1年次終了時、3年次終了時点のいずれも90点を超えており、非常に強い希望があることが示された ($t_s < 1.12, n.s.$)。

現代教養学科も子ども学科も、教員免許取得希望の強さには比較的大きな差は見られなかったが、教員になることに関しては、子ども学科の方が現代教養学科と比べ、強い希望を持っていることが示された。教員になりたいという希望は現代教養学科では入学後に上昇する傾向がある一方、子ども学科では低下する傾向が見られた。それに対し、教員免許取得については、子ども学科の学生は各学年終了時においても入学時と変わらず強い希望が見られた。これは、保育士として勤務する場合でも、「こども園」との関連で幼稚園教諭の免許が求められるといった事情も関係していると考えられる。

2.3.3 教育実習への期待・不安 (1年生のみ対象)

1年生のみを対象に、これから行われる教育実習をどの程度楽しみにしているか、どの程度不安に思っているかについて、6件法で尋ねた結果を Fig. 6に示した。両学科ともに教育実習が少し楽しみではあるものの、非常に不安を感じていることが示された。なお、学科間のデータに大きな差は見られず、統計的にも有意ではなかった (楽しみ: $t [114.34] = .294, n.s.$ / 不安: $t [59.00] = 1.00, n.s.$)。

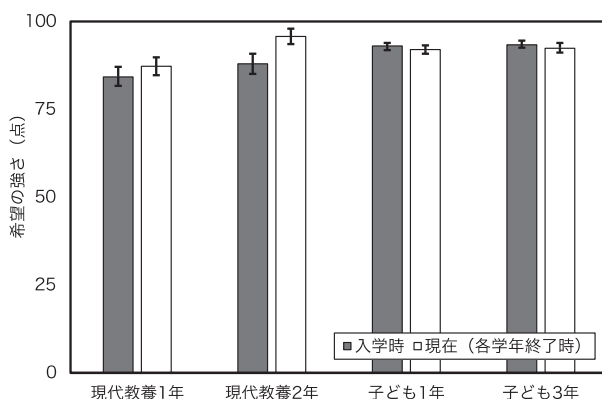


Fig. 5 教員免許取得希望の強さ (最大100点)

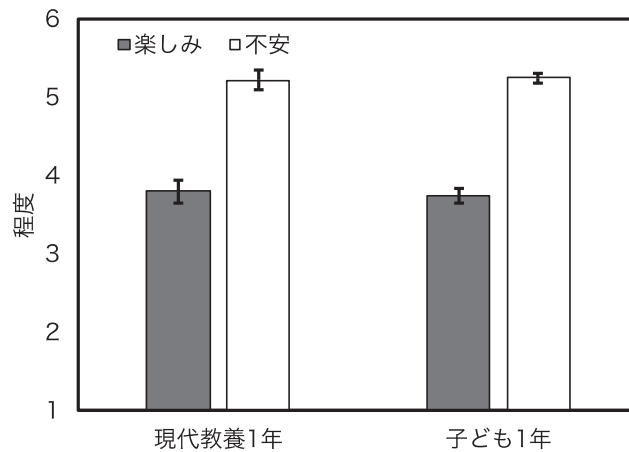


Fig. 6 教育実習が楽しみ / 不安の程度

2.3.4 教育実習で自信のある点（1年生）・できた自信のある点（最終学年）

教育実習の中で行うべき項目を現代教養学科は16項目、子ども学科は18項目を選定し、1年生には「教育実習でできる自信があるか？」について6件法で回答を求めた。同様の項目に対して同じく6件法で、最終学年の学生には、「教育実習でできた自信があるか？」について回答を求めた（Fig. 7）。

現代教養学科、子ども学科の1年生はいずれも、指導案、研究授業に自信がない様子が示された。また、子ども学科では、体育指導、英語等の語学指導、保護者との関係等、短大の授業ではなかなか具体的な方法論を学ぶ機会がない項目に自信がない様子が見られ

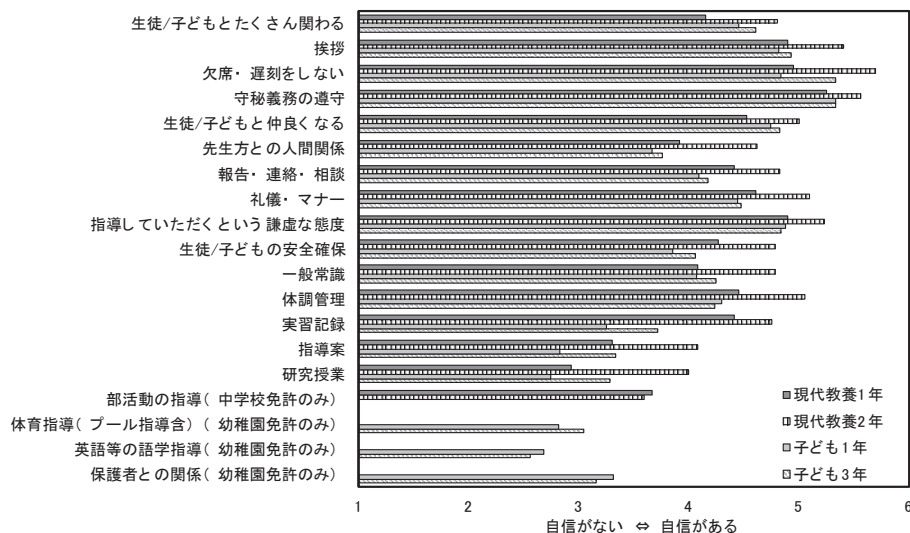


Fig. 7 教育実習でできた自信がある / できる自信がある

た。しかし、いずれの学科も最終学年の学生は、指導案、研究授業については、1年次の回答よりも「できた自信がある」度合いが高まっていた。

また、他の学年・学科に比べ、現代教養学科2年は多くの項目で「できた自信がある」という度合いが高かった。これは、現代教養学科においては2年次に進級する際に、1/3程度の学生が単位を落とすなどして、教職の履修を継続できないという状況が関連している可能性がある。この可能性については、後述する。

2.3.5 教職課程を履修してよかったか（最終学年のみ対象）

教職を履修してよかったと思うかについて、最終学年の学生に6件法で尋ねた結果をFig. 8に示した。いずれの学科も5点を超過しており、教職課程を履修した満足感が高かった。対応のない t 検定を行ったところ、現代教養学科の方が子ども学科の学生よりも得点が有意に高かった (t [227] = 3.72, $p < .0001$)。この原因として、子ども学科では現代教養学科に比べ、教員免許取得がより強く求められていることが関係している可能性が考えられる。現代教養学科では教職課程の履修はオプションという側面が強く、自分で選んで教職課程を履修したという意識が得られやすい。一方、子ども学科では、保育士として就職を希望している学生であっても、「認定こども園も少しずつ増えてきているため、幼稚園教諭を取っている方が就職には有利だ」といった理由で履修している者もあり、そのため、教職を取らざるをえないと感じている者もいた可能性がある。このようなことが教職履修への態度に影響し、その結果、教職履修の満足感の低下につながっている可能性があるかもしれない。

また、教職履修生の人数が関係している可能性もある。現代教養学科の教職履修生（2年生）は、2016年度が33名、2017年度は24名と、教職履修生が毎年100名近い子ども学科に比べ、1/3以下の規模の少人数となっている。結果的に、現代教養学科の教職課程では少人数教育が行われることとなり、また、人数が少ないために教職履修生の結束が固くなるといった状況があることも、教職を履修してよかったという結果につながった可能性がある。

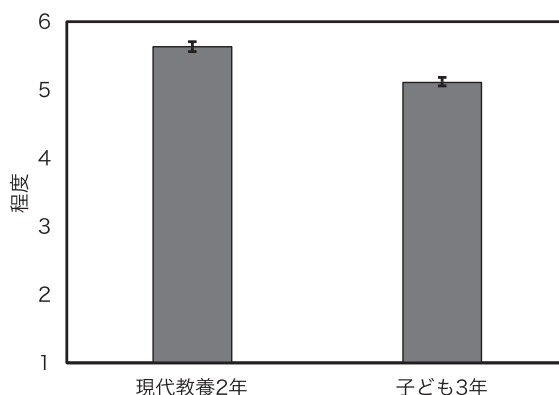


Fig. 8 教職を履修してよかった？

考えられる。

2.3.6 今後の進路

短大卒業後の進路について尋ねた結果を Fig. 9に示した。現代教養学科では進学・編入と就職希望者がそれぞれおよそ40%強であった。子ども学科では進学・編入を希望する学生が30%強、就職を希望する学生がおよそ60%強であった。ちなみに、最終学年の学生は、調査時点ではほぼ進学・編入先や就職先が決定している状況であった。進学先としては、現代教養学科は青山学院大学への編入と他大学への編入がおよそ同数ずつおり、子ども学科は大多数の者が短大専攻科への進学をするが、一部、青山学院大学等へ編入する者もいた。

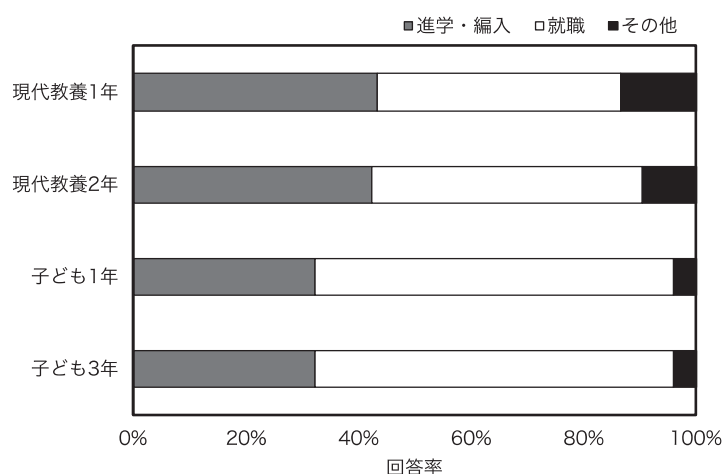


Fig. 9 短大卒業後の進路

2.3.7 教職を継続する学生と中止する学生（現代教養学科1年のみ）

現代教養学科においては、2016年度、2017年度ともに、2年次に進級する際に、1/3程度の学生が単位を落とすなどして、教職の履修を断念するという状況が発生している。教職を継続する学生（教職継続）と教職を中止する学生（教職断念）の学生別に集計し、これらの学生の間にどのような差があるのかを検討した。

まず、教員になるという希望の強さに関しては、教職を断念する学生の方が入学時には高い傾向があるものの、1年次終了時点でその希望が低下する傾向が認められた。一方、教職を継続する学生にはそのような傾向は見られず、わずかながら希望を強めている傾向が見られた。教職を断念する学生は同様に、教員免許取得の希望の強さに関しても、1年次終了時点で低下する傾向が見られた。これらのことから、教員になることや教員免許への希望が次第に低下することによって、学業への意欲も低下し、結果的に単位を落とすといった事態が生じている可能性が示唆される。

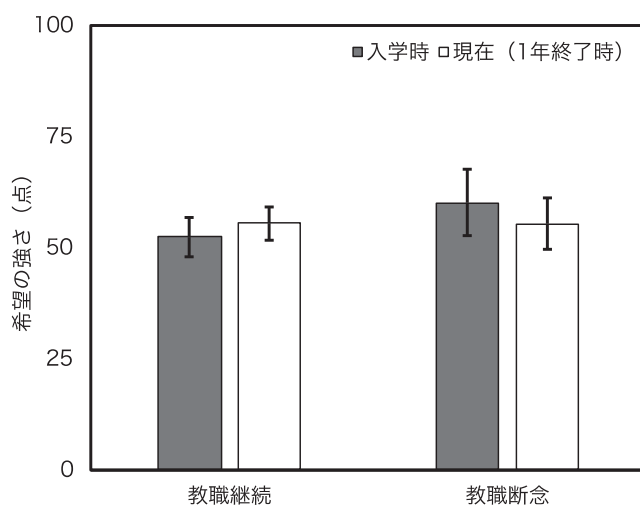


Fig. 10 教員になるという希望の強さ

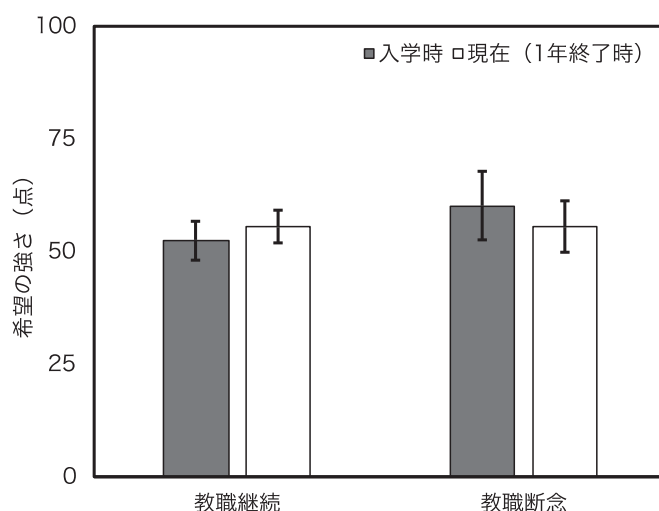


Fig. 11 教員免許取得希望の強さ

教育実習において「生徒とたくさん関わる」「挨拶」等16項目について、自分はできた自信があるかを尋ねた結果について Fig. 7に示したが、現代教養学科2年は多くの項目で「できた自信がある」という度合いが高かった。現代教養学科においては2年次に進級する際に、1/3程度の学生が単位を落とし、教職の履修継続を断念するという状況がこのことに関連している可能性について検討するため、現代教養学科1年生のデータを教職を継続する学生と、教職を断念する学生に分けて集計した (Fig. 12)。Fig. 12から、履修を断念した学生は、1年次終了時点で教育実習でこれらの項目をできるという自信が比較的低いことが分かる。比較的自信が低い者は教職を中止したため、これらのデータが2年生のデー

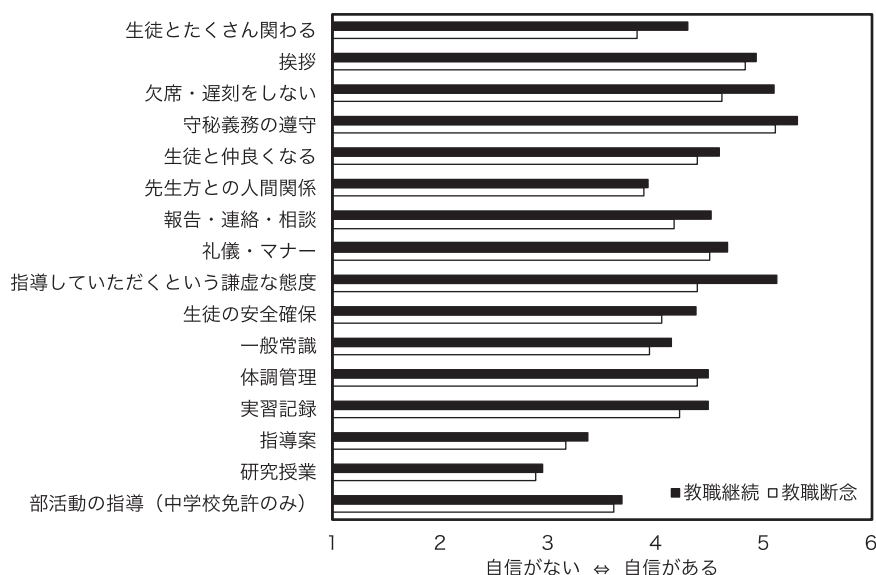


Fig. 12 教育実習でできる自信がある (現代教養学科1年)

タには含まれないことから、全体的に自信の度合いが上がった可能性があると考えられる。

3. 調査2

3.1 目的

調査1では青山学院女子短期大学の学生のみを対象として調査を行ったが、得られた結果が本短大に特有のものである可能性がある。そこで、保育・幼児教育系の学科を持つ他短期大学の学生にも調査を行い、比較した。

3.2 方法

調査1と同時期の2016年度に、神奈川県内で保育士・幼稚園教諭を養成する短期大学児童福祉学科3年生81名を対象に、子ども学科と同一の質問紙を実施した。9割以上回答していなかった1名を除く、80名 (平均年齢 19.71 ± 0.48 歳) のデータを分析に使用した。また、比較対象として、調査1で得られた本学子ども学科のデータを用いた。

3.3 結果と考察

3.3.1 教員免許取得希望年齢・きっかけ

まず、教員免許を目指した年齢について尋ねたところ、その平均は13.48 (± 4.16) 歳であり、本学保育学科の回答 (14歳前後) と同様に小学校、中学校くらいから幼稚園教諭を

目指す学生が多いことが示された。中学校教諭と比べ、幼児教育を目指す学生は幼い頃から希望する傾向があることがわかった。また、教員免許取得を勧められたと回答した者がおよそ36%おり、これらの者のうち母親から勧めたという者が30%弱を占めていた。

3.3.2 教員免許取得希望の強さ

入学時と3年次終了時において、教員になるという希望の強さを100点満点で回答させた結果を Fig. 13に、教員免許取得の希望の強さを Fig. 14に示した。他短大では教員になるという希望は入学時には本学より低かったが、3年次終了時点での希望の強さを比較すると本学とほとんど差がなかった。また、教員免許取得希望の強さは、入学時も3年次終了時点でも90%前後と、本学と同様に高かった。

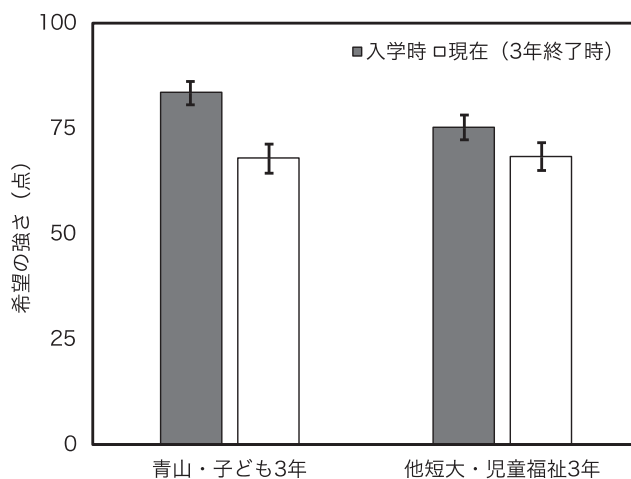


Fig. 13 教員になるという希望の強さ

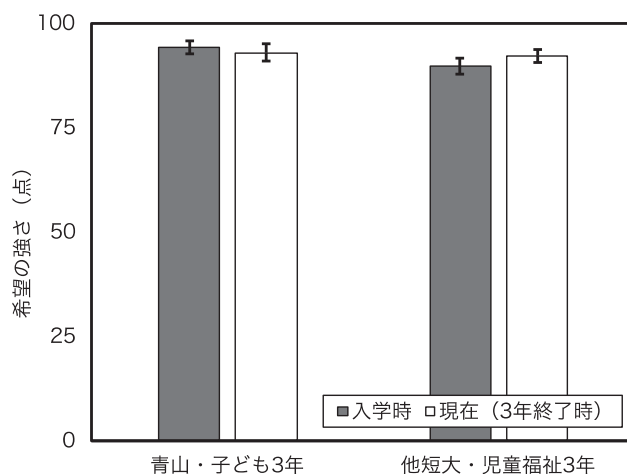


Fig. 14 教員免許取得希望の強さ

3.3.3 教育実習でできた自信のある点（最終学年）

教育実習の中で行うべき項目を18項目を選定し、「教育実習でできた自信があるか？」について、6件法で回答させた。その結果、本学子ども学科同様、指導案、研究授業（研究保育）、体育指導、英語等の語学指導、保護者との関係について、できているという自信が比較的低い傾向が見られた。このような項目は、いずれの短期大学においても学生が不安を抱えやすい項目である可能性が高いことが示された。

3.3.4 教職課程を履修してよかったか

教職を履修してよかったと思うかについて、6件法で尋ねたところ、平均5.04（±0.89）であった。本学子ども学科は平均5.07（±0.93）であり、両校の学生の満足度に大きな差は認められなかった。教職を履修したことへの満足度は全体的に高いと言える。

3.3.5 今後の進路

短大卒業後の進路について尋ねたところ、就職が約84%と大半を占め、進学・編入が約11%、その他が5%であった。本学子ども学科は進学・編入が約30%であり、これは幼児教育系の短大の中では比較的高い数値となっている可能性がある。本学には専攻科があり、そのままの環境で1種免許状と学士まで取得できるといったシステムが、この高い進学・編入率に大きく寄与していると考えられる。

4. 総合考察

本研究では、本学現代教養学科と子ども学科の教職履修生を対象に、教員免許取得をいつから希望していたのか、他者の勧めがあったのか、入学時と現在での希望の強さ、教職を履修してよかったか、教育実習で不安な項目、自信のある項目、今後の進路等について質問紙調査を行った。その結果、現代教養学科と子ども学科を比較すると、子ども学科は比較早い段階で幼稚園教諭になりたいという希望を持ち、教員免許取得への強い希望を持っているのに対し、現代教養学科は入学前後に教員免許取得を希望し、必ずしも教員になりたいという希望を持っていないことが明らかになった。これは、幼稚園教諭になるには短期大学・大学の保育系学科に進学するのが一般的だが、中学校教諭になるという強い希望を持っている場合には4年制大学の教育学部等に進学を目指すことが一般的だからだろう。現代教養学科にはもともと教員になるという強い希望を持つ者が入学することは稀であり、入学にあたって教員免許が取れるため、主に母親といった他者の勧めに応じて教職課程を履修しようという者が多く、教員になるという希望も低いと考えられる。しかし、2年間の学びを終えた段階では、教員になるという希望が当初より強まっており、教職課程の履修が学生にポジティブな影響を与えていると考えられる。子ども学科については、入学時から教員免許取得への強い希望が見られ、それは3年後でも維持されていた。ただ

し、実際に幼稚園教諭になるかについては若干希望の強さが低下していた。これは、保育士やその他の進路への変更があるためだと考えられる。

教職課程を履修してよかったかに関しては、現代教養学科の方が若干満足度が高いことが分かった。これは、大半が教員免許を取得する子ども学科と異なり、現代教養学科では教職課程がオプションという位置づけであり、教職課程を履修していない学生が大半である中で、そのような学生と自分とを比べ、2年間の学びの中身の濃さの違いを実感するような経験があったことや、他の大半の学生と異なり教育実習を体験できたといった意識が影響しているのかもしれない。卒業後の進路に関しては、現代教養学科の方が若干編入・進学率が高いは、これはオプションとしての教職課程を履修する学生にはもともと勉学への意識が高い学生が多いといったことも関係しているものと考えられる。

教育実習への不安は、実習前の誰もが抱えるものであるが、これについては学科間で差は見られなかった。一方、いくつかの項目を取り上げ、1年生に対しては「実習のできる自信があるか」、2年生については「実習でできた自信があるか」を尋ねたところ、全体的に現代教養学科の2年生は比較的「実習でできた自信がある」と答える傾向が見られた。これは、現代教養学科は1年生で教職を履修していたもののうち、2/3程度しか実習に出ないため、1年生の時点で比較的自信のない者 (Fig. 10~12の教職断念) が2年生のデータから抜け、残った比較的自信のある学生 (Fig. 10~12の教職継続) が実習で力を出し、教員としての自信を深めて短期大学に戻ってきたことが関係していると考えられる。現代教養学科で教職課程の履修を継続した学生と、教職課程の履修を断念した学生に実習のできる自信があるか尋ねた Fig. 12からは、この2群の間では「生徒と仲良くなる」と「指導していただくという謙虚な態度」について比較的差が大きかった。指導案や実習記録などではなく、実習の前提となる態度や、生徒との関わり事態に不安を持っている場合に (Fig. 12)、教員になる希望や教員免許取得希望が弱まり (Fig. 10, 11)、教職を断念することにつながる可能性が高いと考えられる。

子ども学科については、本学で見られた傾向が一般的なものであることを検討するため、同じ関東圏で3年制の短期大学の保育系学科とデータの比較を行った。その結果、教員になるという希望は入学時には本学の方が若干高いものの、3年次終了時にはほぼ同程度であり、教員免許取得希望はいずれの短期大学でも高い水準にあった。また、いくつかの項目について、実習でできた自信があるかを尋ねた結果や、教職課程を履修したことに対する満足度も高く、両者の間に大きな差は見られなかった。ただし、卒業後の進路については、本学の学生は進学・編入を目指す者が3倍近く多いことが分かった。これは、本学の学生が1種免許を取得してから現場に立つという選択をする傾向にあるか、あるいはそのような選択が許容される環境にある者が多いのかもしれない。ちなみに、短大卒業後に1種免許取得を目指す学生は、本学で多く見られたものの、これは本学に特有の傾向というわけではなく、全国の短期大学でも散見される (e.g. 山本、2001)。

ここで、短期大学における教職課程の意義について考えたい。教員免許取得の希望には

入学時と最終学年で大きな差はなく、強い希望が一貫しているものの、教員になるという希望の強さは変化することが示された。教育実習をはじめとする様々な勉強を通じて、適性を見極め、教育現場の現状を目の当たりにして、将来の希望を変化させる者が一定数存在することが明らかになった。もともと教員への希望の強い子ども学科等の幼児教育系の学科では、希望が弱まる傾向が見られたが、教養系の学科では、その希望が強まる傾向が見られた。いずれの場合にしても、短大の教職課程での勉強を通じ、将来の希望が変化するという事は、短大での教職課程が学生の職業選択に一定の役割を果たしているといえるだろう。

もし、修士レベルで教員免許状取得が可能になるような状況になった場合（中央教育審議会、2012）、このように短期大学や大学で教職課程を受講することで教師という進路を選択、あるいは取りやめることは困難になる。短期大学や大学だからこそ進学できる者がいる現状を考えると、短期大学における教職課程はそのような学生に教員への道を開く重要な方策の一つである。また、特に教養系学科では教員になる希望は当初必ずしも高くないものであっても、学ぶ中で教師という進路を選択する者が一定数いるという現状は、職業選択の機会を幅広く提供し、また、短期大学という2年間あるいは3年間の学びの早い段階で、教師としての適性を見極める機会を提供するという意味で、重要であると考えられる。短期大学で免許を取得したものには、専攻科や4年制大学への進学・編入で1種免許を取得できる道があり、実際に本学では30～40%ほどの学生が編入・進学している状況を考えると、教員になる第一段階として短期大学の教職課程が存在することは、十分に意味があると考えられる。また、例えば2020年度に小学校において英語が必修化される。このような場合に、短期大学で英語の中学校教諭2種免許状を取得し、その後、例えば青山学院大学教育人間科学部といった編入先で小学校教諭1種免許状を取得した学生は、小学校の現場で重宝されると考えられる。また、近年不足が指摘される家庭科の中学校教諭2種免許状を短期大学で取得し、編入先の大学で英語や国語などの中学校教諭1種免許状を取得するといった場合にも、教員採用の場面で有利であることが予測される。というのも、今後子どもの数がますます減っていった場合に、1人の教員が複数の免許状を持っていることが現場から望まれるのは、想像に難くない。このような状況を考慮すると、短期大学において2年間で免許が取得できることは、教員を目指す者にとって大きな選択肢の一つになると考えられる。もちろん、2年間あるいは3年間だけの教育で教員免許が取得できることに、教員の力量不足などの不安を抱く意見もあるだろう。しかし、短期大学卒業後の学びを組み合わせることで、このような不安は解消されるとともに、4年制大学で1つの免許のみを取得した教員よりも、現場で望まれる要件を持つ教員が養成される可能性があるだろう。

5. まとめ

本研究では、短期大学で教職課程を履修している学生の意識や教員になるという意思の変化、進路などを質問紙法により検討した。その結果、教職課程の履修が学生の教員になるという意思に一定の影響を及ぼしていることや、教職課程を履修することで大きな満足感を抱いていることなどが明らかになった。短期大学において教職課程が履修できるということは、学生にとって大きな意義を持つことが確認できたと言える。さらに、少子化がますます進行するという社会情勢上も、短期大学で教員免許が取得できるという今の制度が重要な意味を持つことを踏まえると、短期大学における教職課程は今後も重要な役割を果たすものと考えられる。

6. 謝辞

青山学院女子短期大学子ども学科元教授で本プロジェクトのリーダーである岸井慶子先生、和泉短期大学副学長で本子ども学科非常勤講師の松浦浩樹先生には、データ収集に関して、多大なお力添えを賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 福伊 智・佐々木正治・胡 泰志. (2005). 学生の教職志向意識と学習モード (SDCL; Self-Directed Continuing Learning) に関する実証的研究 (4) 短期大学の場合 第1報. 比治山大学短期大学部紀要、40、13-24.
- 中央教育審議会. (2012). 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申). 文部科学省ホームページ 8月28日
<http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_ics_files/afildfile/2012/08/30/1325094_1.pdf> (アクセス日: 2017年3月6日)
- 田中敏明・二子石諒太・永渕美香子. (2016). 保育者を目指す学生の教職意識－小学校教員を目指す学生との比較を通して－. 九州女子大学紀要、52 (2)、131-144.
- 山本 勉. (2001). 短期大学における教職課程の意義と課題－実践的指導者の育成をめぐる様々な問題と課題. 教師教育研究、14、41-48.

Junior College Students' Attitudes Toward Teacher- Training Course

Miki UETSUKI

In this paper, we used questionnaires to examine the attitudes of students taking the teacher-training course at Aoyama Gakuin Women's Junior College and the course's significance in terms of influencing students' eventual decision to pursue a teaching career. When they entered the college, students from the Department of Contemporary Liberal Arts did not harbor a strong ambition to become teachers. However, their teaching aspirations grew as they underwent the two-year teacher-training course. In contrast, students in the Department of Childhood Studies had a strong desire to become teachers when they joined the college. They aspired to become teachers at relatively younger ages than the liberal arts students, and some of them hoped to become childminders or get other jobs after finishing the course. These findings show that the course contributes to the career choice of students in both departments. Both groups of students were satisfied with the course. Moreover, 30–40% of students transferred to four-year universities, with most choosing to undergo further teaching-related training. Thus, teacher-training courses at junior colleges can be the first step in encouraging students to consider a teaching career and evaluating their aptitude for teaching.

Keywords : junior college, teacher-training course, students' attitudes
